

秋水通信

第28号

2020.5.20

幸徳秋水を顕彰する会
四万十市右山五月町 8-22
四万十市立中央公民館

HP: <http://www.shuusui.com/>
090-6827-9129 (田中全)
mail:zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp

幸徳秋水刑死109年 坂本清馬没45年 合同墓前祭

合同としては二回目になる秋水・清馬墓前祭を一月二四日(秋水刑死日)開いた。例年は秋水だけだが、五年前(清馬没四〇年)から五年に一度、清馬との合同祭としている。

二日前の天気予報は雨であったことから、事前に献花台の上にテントを張った。しかし、曇天ながら、雨は落ちてこなかった。

参加者は記帳七一名だが、実際はもう少し多く八〇名くらいか。神戸から八名、東京、大阪、岡山、熊本から各一名と、県外からが例年より多かった。

顕彰会宮本会長が代表献花と追悼文を読み上げ、続いて、順次献花。

最初に、遺族・関係者、地元田中和夫さん(幸徳家)、長尾正記さん(駒太郎実家)、豊中市岡崎悦明さん(小野家)。



清馬養女ミチエさんの姪
保岡典江さん



受付、書籍販売

初めて、坂本清馬関係者として養女ミチエさんの姪(兄の娘)保岡典江さんが愛媛県旧一本松町からみえてくれた。ミチエさんのことは四ページに詳しく書いている。

次に、市長(田村副市長、議長(川瀬議員)、教育長(小松生涯学習課長)、中村商工会議所(地曳専務)、中村地区労(小野会長)、中村九条の会(渡辺事務局長)、正福寺佐藤嘉辰住職。

市外から、高知市自由民権友の会(岡林会長)、神戸代表津野公男さん、東京亀田博さん、岡山森雄二さん、熊本下川征男さん。

その他の参加者には、あとでそれぞれ吊ってもらった。献花者を代表して二人に挨拶をしてももらった。



清馬命日供養 1月15日

神戸津野公男さん。今年十月一七日、神戸で予定している第五回大逆事件サミットの実行委員会を代表して、参加を呼びかけた。

東京亀田博さん。アナキズムと金子文子研究者で、昨年五月にも韓国秋水研究者金昌徳さんと一緒に秋水墓参にみえ、それをきっかけに中村と韓国の交流が始まった経過(前号報告)について話をしてくれた。

来年は秋水刑死110年、生誕150年(明治四年生まれ)となる。これまで刑死十年刻みで規模を大きくした記念事業を行っているが、来年は一月二四日に加え一月五日(秋水誕生日)に合わせ記念講演会、展示会などを行いたいと思っており、詳細を詰めていきたい。

目玉は秋水二つ目の記念碑建立。場所は正福寺庭を予定。これらのことを参加者のみなさんに報告、協力をお願いした。記念講演会は午後二時半から、市立文化センター大会議室で。講師尾崎清(顕彰会副会長)「坂本清馬の思い出」。約五〇人参加。内容は後掲の通り。意見交換、交流も行った。

会場には、清馬が書き残した直筆手記なども展示。一九六四年、アサヒグラフで紹介された記事、写真なども。

なお、清馬の命日一月一五日には、顕彰会役員ら十人で弔い、正福寺佐藤住職に読経をあげてもらった。

神戸サミット 10月17日

合同墓前祭にみえた神戸の八人は第五回大逆事件サミット(神戸)の実行委員会のみなさん。代表の津野公男さんは高知県須崎市出身。同サミットは秋水刑死百年の二〇一一年、中村で第一回を開いた後、豊津(福岡)、大阪、新宮と続けてきました。

神戸は、平民新聞読書会等を開いていた高知市生まれの小松丑治、岡林寅松が大逆事件に連座(無期懲役)させられた地であり、二〇一八年四月、「幸徳秋水を語る会」を開いたのを機に、当顕彰会と交流を続けています。

合同墓前祭の前日には、高知市内にある小松丑治、岡林寅松の墓を案内(東京亀田博さんも)し、みんなで二人を弔ってくれました。

神戸サミットは十月十七日(土)午後、兵庫中央労働センター(神戸市中央区山下通六一三一二八)で開かれる予定です。

問合せ 津野さん 090-2490-1879
E-mail: kinotsunochi@yahoo.co.jp



小松丑治墓参
神戸のみなさん

安岡友衛とスペイン風邪

今世界を恐怖に落とし入れている新型コロナウイルス（良亮の妻）から「なんでそんな怪しからスペイン風邪がある。」

一九一八（大正七）年〜一九二二（同十）年、三波にわたって猛威をふるった。当時の世界人口の三分の一がかかり、四五千万人が死亡、日本でも約四十万人が命を落としたと言われている。

当時、中村の医師であった安岡友衛も妻瀧江をスペイン風邪で失っている。友衛は幸徳秋水より二歳下（明治六年七月一日生）の従弟。父は安岡良亮の弟良哲、母は秋水の母多治の妹嘉弥。

明治四一年五月、秋水最後の帰省中、岡山の森近運平が中村に訪ねてきた。その時、幸徳家親戚を交えて撮った記念写真の中に友衛も写っている。

同じく秋水の従妹の岡崎輝（旧姓小野）が戦後書いた「従兄秋水の思出」によれば、秋水が東京で最初の結婚したのは、友衛も医学の勉強のために東京に出ていた頃であった。秋水は相手（西村ルイ）が気に入らず、すぐに実家の福島県郡山に帰した。その時、送り届けさせられたの



前列右より
安岡友衛、森近運平、秋水
明治41年5月中村で

が友衛であり、あとで輝の祖母安岡千賀（良亮の妻）から「なんでそんな怪しからん使いに行つたか」と叱られた。

友衛は医師として秋水母多治の最期を看取った。友衛は秋水と同じ木戸明門下生で、漢文の才もあつた。秋水は獄中から母あてに送つた有名な漢詩「七十阿嬢泣倚門」の意味は友衛に聞くようにと書き添えた。友衛はその通り教えてやつた。友衛の往診には警察の尾行がついた。夜の往診に出る時、娘からこわくないのかと聞かれ、お巡りさんも一緒だから平気だよと笑つた。

岡崎輝は晩年、中村の郷土史家上岡正五郎氏への手紙に「友衛は」立派な人格をそなえていました。私は身辺の人のうち最も尊敬したのは（安岡）秀夫でも秋水でもなく友衛兄でした」と書いている。

友衛の妻瀧江がスペイン風邪で死んだのは六人目の子を出産した直後。医者のは友衛は、いろんな措置を講じようとしたが、急な高熱で間に合わなかつた。瀧江三七歳。大正七年一月三十日のこと。当時、妊婦が多くやられたという記録がある。この時生まれた和子さんはのちに初代中村市長になった森山正氏に嫁いだ。

友衛自身もその三年後、大正十年十月三十日、喉頭ガンで没。五一歳であつた。以上の話は、友衛の孫の歌人岡添眞子さん（友衛の次女惇子さんの娘、中村在住）から聞かせてもらった。

きつと来る新型コロナウイルスはスペイン風邪で死にしろが祖母 二月 眞子
作
（田中全）

裁判所の塀と秋水桜

幸徳秋水の墓がある浄土宗正福寺の墓地は裁判所と隣接しており、境界には裁判所が建てた塀がある。この塀が今年三月末取り壊され、新しく作り替えられた。（古い塀は一ページ墓前祭写真の通り）

正福寺は承元元（一一〇七）年建立された、法然ゆかりの古い寺である。尊王攘夷運動がさかんだった当地では、明治になると廃仏毀釈が横行。中村の他の多くの寺院と同様、明治四年、正福寺も廃寺になった。

明治九年、広い本堂跡には中村区裁判所（検察部併設）が置かれた。最初は本堂建物をそのまま使つたのかもしれないが、記録が残っていない。現在は高知地方裁判所中村支部、同検察局中村支部になつている。

墓地はそのまま、明治三六年、寺が再興された際、新しい本堂は今ある位置（高知県幡多総合庁舎隣）につくられた。

秋水刑死の三か月後、明治四四年四月、堺利彦が幸徳家慰問に来た際、京都丹波の岩崎草也に報告した葉書は裁判所の写真が載つた絵葉書を使つており、当時の

裁判所の様子がうかがえる。

戦後の写真によれば、墓と裁判所の境には、木が植えられていたようだが、昭和五四年、裁判所、検察庁が建て替えられたさい、ブロックを積み上げた塀が作られた。

しかし、経年劣化と次の南海地震対策として、墓入口付近の検察庁敷地の塀が昨年九月、秋水、清馬墓に面した裁判所敷地の塀が今年三月、樹脂製フェンスに替わつた。（顕彰会看板は山側へ移動）

幸徳家の墓が正福寺につくられたのは、裁判所ができるずっと前の江戸中期であるが、のちに秋水が不義不当な暗黒裁判によって処刑され、ここに眠つていふことを考えると、断ちがたい因縁のようなものを感じる。

秋水墓は禁断の墓とされ、日本敗戦まで、参拝者は裁判所窓越しに監視された。秋水は死んでも安らかに眠ることを許されなかつた。

今では、いつ植えられたのかわらないが、裁判所庭の桜の大きさが秋水、清馬に詫びるように塀を越えて枝を伸ばしている。

恩讐を超えたように花を咲かせ散らすこの桜を私たちは「秋水桜」と呼んで、満開の時期に墓に集つている。いつか塀もなくなつてほしいと思う。



作り替えられた塀



裁判所庭の秋水桜

回想の坂本清馬

顕彰会副会長 尾崎 清

一月二四日、秋水・清馬合同墓前祭の記念講演会の内容を改題、加筆したものである。

坂本清馬翁については、その思い出を以前にも本欄に書いたことがあるが、最近翁の顕彰に力を入れている本会のことだからだろうか、編集部よりもう一度書いてくれとのたつての依頼があったので、前回とできるだけ重ならない様注意しながら書いてみる事にした。

清馬翁は、社会運動や市議をしていたうちの父親と親しくて、日課の散歩がてら町の郊外にあったわが家によく立ち寄っていた。

父が不在のときは、時々私が話し相手になったのだが、翁より六十年下の私が二十歳前後のことである。

もう八十に手が届きそうだった翁だが、短躯な五体には精気が充ちている様に思えた。家の横手を走っている長堤の上で、町から下ってきた翁とぼったり会ったりすると、その鋭い眼光に思わずたじろいだりしたものだ。

長い入獄中、健康保持に余念のなかった翁は、健康法に精しく薬草のことなど



アサヒグラフ1964年より

もよく知っていた。或るとき桑の若葉を手にした翁が、これをジュースにして飲むといふんだとうれしそうにしていたことや、養命酒はいいよ、わしは毎日一カッブは飲んでいると、重いノイローゼに悩んでいた私に勧めてくれたことなどが思い出される。

父が不在な時は私が話し相手というより、翁の話の聞き手になっていたものだが、私の印象では翁は、知識欲旺盛な情熱家に見えた。私にとって翁の印象はその一点に尽きると言っても良い。

後に翁の伝記「残夢」を書いたノンフィクション作家の鎌田慧氏が中村に来た時、私も何回かお手をしたものだが、その時鎌田さんも「坂本さん所蔵の本を見ると細かい字でびっしりと書き込みがあるね」と話していた。丹念な読み込みが印象的だったのだろう。

尚、秀れたルポライター、ノンフィクション作家である鎌田氏による伝記「残夢」は翁への何よりのはなむけであろう。

清馬翁から聞いた話で印象に残っていることを二つ、三つ書いておこう。

まず秋水については「先生は秀れた革命家であつたが、秀れた革命家で



同上

は無かつた」と言っていた。これについては、若い頃秋水と一時決別した事情もからんでいたようだが、後半生を秋水の出身地中村で過ごしたのだから、秋水への想いは深かつたのだろう。

管野スガを語るときには八十になんなんとする翁の頬が赤らんだ。姉のように慕っていたというが、初(うぶ)な心をかいまみせられるようだった。「管野さんは美人というほどではなかつた。だがあの頃の女性には総じて表情というものが無かつたが、管野さんには豊かな表情があつた。それが魅力的だったのだ」と話していた。

私が一番感銘を受けた翁の話は「人間には持つて生まれた能力がある。十の才能を持つて生まれてくる者も、五の才能しか持たない者もいる。しかし肝心なのは、その能力をいかに出し切るかだ。仮に五の才能の人が全てを出し切り、十の人は半分しか出せなかつたとするならば、五の才能の人が人生をよりよく生きたと言える」というものだ。この話にはその時感動したが、半世紀もたった今でも思い出して感銘を新たにしている。

もう一つ、北海道知事や衆議院副議長をやつた横路孝弘氏の父親は、確か横路節雄という社会党の代議士で、当時なかなかの論客で私も知っていたが、この人がぼつくり亡くなつてしまった。私はそ



同上 養女ミチエさんと

れを残念に思い、清馬さんが家にきた時「横路さんは残念でしたね」と言うのと、「革命家がぼつくり若死にするようではダメだよ。革命家は命を惜しみ、命を大切にしてい長生きをし、人民に尽くさねばならない」という言葉が返つてきてびっくりした事がある。

最後に、翁の後半生を支えた養女ミチエさんについて少し書いておこう。

長い刑期の上出獄した翁は、戦時中逼迫するガソリン不足対策の一つである松脂採取事業にたづさわつていたが、その足場としていた中村の旅館「花屋」で女中をしていた南伊予一本松町出身の保岡ミチエさんと出会い、やがて彼女と養子縁組をし、養女にもらつていく。

ミチエさんは小柄で温和なきれいな人だったが、翁の後半生の生活はこのミチエさんに支えられていた。

私の父親などが、生活保護を受けるよう随分勧めたようだが、「国の世話にはならん」という翁の決意は固かつたようである。暮らしは養女ミチエさんの細腕にかかつていた様だ。住んでいた東下町でも大橋通りでも、うどんなどの軽食堂をやつていたようだが、伝え聞いたところでは、私の小学のときの同級生の父親が経営をしていたバーで働いていたこともあつたようだ。

清馬翁が亡くなつてからは大人しい人だっただけに、わが家との行き来もほとんど無くなつてしまつたが、後年ひっそりと亡くなつたようだ。

だいぶたつてからそれを伝え聞いた母と私は、一本松町の実家を訪ねて、ご在宅だった兄嫁さんに巾着の言葉をかけたことであつた。兄嫁によるとミチエさんは実家の菩提寺に眠つているといふことだつた。

清馬の養女ミチエさん 田中 全

中村で定職のなかった清馬の生活を支えたのは養女ミチエさんだった。

清馬自伝「大逆事件を生きる」によれば、清馬は一九三四（昭和九）年仮出獄後、高知で結婚したが未入籍のまますぐに別れた。

その後、太平洋戦争中、松脂採取業で中村に来ていたさい、常宿で女中をしてきた「遠い親戚の娘に女房にならんかと持ちかけたら、養女にならなくてもいいと言われて、その娘の父親にかけあい、養女に来てもらった」と書いている。

私は二〇一八年十月、ミチエさんの墓参りに愛媛県一本松町（現愛南町）を訪ねた。ミチエさんは実家の保岡家墓に入っており、姪（兄勝久さんの娘）の真喜子さん、典江さんから写真（左の二枚など）を見せてもらいながら、以下の話（両親、兄から聞いている話を含めて）を聞かせてもらった。

ミチエさんは一九一五（大正四）年二月二七日、農家の父保岡仲蔵、母コマの次女（二男、四女の四番目）として一本松町に生まれた。若いころから中村に出て、旅館花屋の女中をしていた。どんな経緯で中村に出たのかは聞いていない。清馬が一本松に来たのは一度だけ。清



娘時代のミチエさん

馬の兄の息子（自伝に出てくる姉の息子義彦のことか？）の嫁にもらいたいの話だった。その後、その甥が戦死。親はミチエさんに家に戻るか聞いたが、このままがいいと清馬のところに残った。

保岡家が清馬と親戚だったという話は聞いていない。（清馬は一八八五年生まれで三十歳上。養女として入籍はずっと後の一九六五年）。

戦後の一九五四（昭和二九）年、ミチエさんが家を建て食堂（うどん屋）をしたいというので兄は田んぼを売って資金をつくってやった。少しずつ返済を受けた。家の前に保健所があったのに、移転してからは客が減ったときいた。

清馬の葬儀（一九七五年）には、兄、私（典江さん）、妹で行ったが、追悼集会には行かなかった。

ミチエさんは年に一、二度は盆の墓参りなど、バスを乗り継いで帰って来た。おいしい和菓子をみやげに。ハイカラな身だしなみで化粧をして、ヒールもはいていた。兄弟姉妹が集まり、二、三泊していた。おだやかで、ゆつくりとしゃべる人だった。

晩年、私（典江さん）が中村の家に行った時、家の中におしぼりをたくさん持って帰っていたのを覚えていた。料理屋の手伝い、掃除、病人の付き添いなどをしていたようだった。一九九六（平成八）年五月一日、ガンのため中村の病院で亡くなった。臨終には間に合わなかった。葬儀は火葬場の斎場で身内だけ。中村に友達がいようには思えなかった。享年八二歳。戒名・恵照妙乗信女位。自分の財産処理は公証人に委任していたので、家もすぐ買い手がついた。

ミチエさんは生前、一本松の常宝寺に清馬の永代供養として位牌を預けていた。後に高知の親戚という人が来て、相談のうえ持つて行った。

清馬所蔵の本は、清馬没後ミチエさんが中村市立図書館に寄贈したが、手書き原稿・書類等はゴミのようにたくさん残っており、全部いったん一本松に持ち帰った。そのあと大部分は捨てたが、弟が大事そうなものを残し、西口孝町会議員（共産党）に預けた。清馬の墓は高知のほうにあるものと思っていた。中村にあるとはいままで知らなかった。

ミチエさんはおとなしく、目立たない人であった。ミチエさんは清馬のことを「お父さん」と呼んでいたそう。

私はこのほど二人が住んでいた家（中村大橋通五丁目）の近所に住む年配者の何人かに聞いたところ、ミチエさんのことは覚えており、おとなしく品のある人だったという印象を持っていた。しかし、その中に親しく付き合っていた人はいなかったし、他に友達がいようにも思えないとのことだった。二人を夫婦と思っていたという人もいた。

顕彰会会員でも清馬没後のミチエさんの生活の様子や消息を知る人はほとんどいない。ミチエさんは顕彰会とは「関係ない」人となってしまう。清馬の原稿類が残さっていることも忘れられていた。



清馬追悼集会（中村）で

ミチエさんが亡くなったことも知らなかったぐらいだから。

わずかに、生前の清馬の面倒をみてきた尾崎栄さん（一九九四年没）の家族が後でミチエさんの死を知り、栄さんの妻と長男（清氏、本号寄稿）が一本松の保岡家を弔問している。

つくづく考える。ミチエさんはなぜ清馬と一緒に暮らすことを受け入れたのだろうか。天皇暗殺を企てた極悪人とされていた戦中のことである。当時、二十歳代半ばという若い身で、相当な覚悟があったのだと思う。

写真で清楚にみえる娘時代のミチエさん。実家は堅実な農家で、兄、姉妹は普通に結婚し家庭をもっていた。みんな仲が良かった。ミチエさんの身に秘めた何かがあったような話もない。

世間から相手にされない清馬の話を、ただ一人旅館の女中として黙って聞いてやっていたという話もあることからすれば、清馬に同情する、共通の心の寂しさをもっていたのかもわからない。

二人が一緒に暮らすようになった経緯も、清馬自伝と保岡家の話は違う。清馬の甥の消息がわかればいいのだが（本場に戦死なのか）。清馬の位牌を持って行ったという親戚とは？清馬両親、兄姉の墓がどこにあるのかもわかっていない。

ミチエさんの生活は二人の時も、一人になつてからも地味でつましいものであった。しかし、実家に帰る時はハイカラな格好をしていたのは、芯の強い人であったのだろう。自分の死後の段取りまでつけていたというのだから。清馬と同じ墓に入りたという気持ちはなかったのだろう。

清馬を支え、尽くしたミチエさんのことはもっと知られるべきだと思う。清馬資料はその後当顕彰会に戻ってきて、いまは私が管理している。